NARIWA MUSEUM

高梁市成羽美術館だより

NO.36◆2020.3

編集・発行：高梁市成羽美術館
〒716-0111 岡山県高梁市成羽町下原1068-3
TEL 0866-42-4455 FAX 0866-42-4451
https://nariwa-museum.or.jp/

児島虎次郎のアトリエ再現展示
「画家とパレット ―近代の巨匠たち」展覧会場にて

児島虎次郎没後90年・開館25周年記念
画家とパレット ―近代の巨匠たち
2019年9月14日[土]～12月11日[水]

モーリス・ユトリロのパレット
1933年頃 木製 28.0×37.0㎝

２０１９年秋、高梁市成羽美術館では、児島虎次郎没後90年と新築開館25周年を記念して、「画家とパレット ―近代の巨匠たち」を開催しました。ピカソやダリ、マティスなど近代を代表する巨匠から、児島虎次郎をはじめとする岡山ゆかりの作家まで、画家が実際に使用していたパレットと作品、あわせて約１００点を一堂に展覧しました。また、当館としては初の試みで、倉敷市酒津に存在した児島のアトリエを会場の一角に再現展示し、秀作が幾枚も生み出された当時の空間をご紹介しました。

パレットとは、画家が使う道具の一つです。絵具を混ぜ合わせる時などに使用し、片手に持って使うこともあれば、平置きで使うこともあります。形や素材は様々で、木製が軽くて持ちやすく、長年使い込むことによって味が出るため人気ですが、中には大理石のものを使う画家もいて、それぞれに好みが分かれる道具と言えるでしょう。パレットを見ると、画家によって絵具の置き方や分量、配色に至るまで様々であることがわかります。使い込まれたパレットは、画家の性格や癖までもが垣間見え、作品を鑑賞する上でより深い理解へと繋がる媒体にもなりました。

オープニングギャラリートークでは、日動画廊社長 長谷川徳七氏、副社長である長谷川智恵子氏をお招きして、生前の作家の様子や、それぞれのパレットにまつわる秘話などをお話しいただきました。「フランソワーズ・ジローのパレットは笠間で個展をした際に寄贈を受けたもので、完全に乾いていない状態で届いたため、額縁に絵具がしたたっている。」というお話や、「梅原龍三郎先生は豪放磊落でおいしいものが大好き。一日中お酒を飲んでいるけど酔っぱらわない。肝臓が二つあったのでは。」といった画家の人となりがわかるようなエピソードまで、実際に作家と会ったことのある長谷川氏ならではの内容に、会場に集まった皆さんは興味深そうに耳を傾けていました。

その他会期中のイベントとして、10月5日(土)に記念講演会『ヨーロッパと児島虎次郎』(講師：児島塊太郎氏)、11月16日(土)にワークショップ「三原色で描く―秋の味覚」(講師：佐藤孝洋氏)を開催しました。

今回展示したパレットは、どれも画家が〝画家〟として生きた軌跡を今なお生々しく感じさせるものでした。会場にお越しの方からは「作品は観たことがあったが、作家が使っていたパレットを見るのは初めて。どのパレットも美しかった。」とのお声をいただきました。開催に際してご協力いただきました、公益財団法人日動美術財団をはじめ、関係者各位にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。

会場風景

9月14日(土) オープニングギャラリートーク
作品の前で、作家との思い出を語る
長谷川徳七氏(中央)と智恵子氏(左)

10月5日(土) 記念講演会
アトリエ再現コーナーを解説する
児島塊太郎氏(成羽町美術振興財団理事長)

ワークショップ
「三原色で描く―秋の味覚」

11月16日(土)、「画家とパレット」展の関連イベントとして、画家の佐藤孝洋さん(白日会会員)を講師にお招きし、絵画制作のワークショップを行いました。本ワークショップは、色の三原色「赤・青・黄」に白を加えた4色の不透明水彩絵具を用いて、柿を描くというもの。混色を通じて、色彩の原理や道具の扱い方を知り、画家の創作を追体験していただくことがねらいです。

制作がはじまると、参加者の皆さんは休憩も取らずにもくもくと筆を進めていき、パレットや画面上には、たった4色の絵具から豊かな色彩が広がっていきました。ワークショップの終わりに、それぞれの作品とパレットの両方を並べて鑑賞してみれば、混色の仕方や絵具の水分量、筆の使い方など、様々な創作の秘密が一目瞭然。柿のみずみずしい色彩や質感を思い思いに表現しようとした跡が見て取れました。体験を通して、今回の「画家とパレット」展の鑑賞のヒントがそれぞれに得られたのではないでしょうか。

岡山県芸術文化育成・支援事業

加藤竜 新作展「緑の叫び」

2019年10月22日[火]～12月11日[水]

会場風景

県ゆかりの芸術家を支援するとともに、県民に対して優れた芸術に触れる機会を提供する、岡山県芸術文化育成・支援事業の一環として、加藤竜（1978－）の新作展を開催しました。加藤は岡山県新見市に生まれ、2006年にベルリン国立芸術大学を卒業後、現在もベルリンを拠点に活動しています。2012年には、第5回岡山県新進美術家育成「I氏賞」大賞を受賞するなど、国内外で注目を集める新進気鋭の画家です。本展覧会では、新作を中心に大作10点を展観しました。作家本人にこの度の展覧会を振り返っていただきましたので、以下にご紹介します。

加藤竜 新作展「緑の叫び」を開催して

加藤竜

私の絵画のテーマは、環境問題を軸にした「人間と自然の関係」です。世界規模で様々な環境問題が起こり、地球上の生命の存続を脅かす時代になったにも関わらず、日本の環境問題に対する全体的な意識は、まだまだ低いのが現状です。

今回の個展「緑の叫び」展には、様々な環境問題、破壊について日本の人々にももっと考えてほしいという私の願いを込めました。具体的には日本が直接関わる捕鯨問題、トランプ大統領のもとのアメリカ政治によりもたらされる間接的な環境破壊、また世界中から非難を浴びているにも関わらず未だに文化として行われている残虐な闘牛等、多種多様な環境問題に関連した題材が作品のテーマとなっています。

個展のオープニングではギャラリートークで、私のこれまでの活動の経緯を語り、また築山弘毅さんとの対談を通してドイツと日本のアートシーンについてお話し出来た事を、皆様に私の芸術をより理解していただくためのよい材料になったと嬉しく思いました。

日本のアート事情に合わせ、日本ではこれまで小さめな作品を主に展示していました。今回は安藤忠雄設計の大きな素晴らしい空間で展示する機会を頂けたので、普段制作しているサイズのように、幅160cmから200cmのサイズの大作ばかりを展示しました。このような大きなサイズでこそ、私本来の表現をキャンバスの中に満たすことが可能なので、加藤竜本来の絵画表現を日本の多くの方にも見ていただけたことが大きな喜びでした。

これからも様々な環境問題を作品を通し人々に訴えるため、作品の表現力の更なる向上を目指し模索して行こうと思います。

加藤竜によるギャラリートーク

展覧会場にて、自身の生い立ちや芸術観、作品の制作意図についてトークする加藤（中央）。来場者を交えての質疑応答も盛んに行われました。

加藤竜×築山弘毅 対談

「日本とドイツのアートシーンについて」

同じくドイツ滞在の経験がある第12回「I氏賞」大賞受賞作家 築山弘毅氏（右）とともに、各国のアートを取り巻く社会の在り方や考え方の違いについて語りました。

表紙解説

「児島虎次郎のアトリエ再現展示」

児島虎次郎はヨーロッパで5年の絵画修行を終えたのち1912年に帰国、倉敷の酒津にアトリエを構えて終生ここで制作に励みました。この度児島虎次郎没後90年を記念して、初めてアトリエの再現を試みました。

当時のアトリエを撮影した写真からは、室内の壁に掛けられた多数の児島作品が見て取れます。60歳までは修行の身であり、作品は習作であって完成作品ではないと言っていた児島は、自ら作品を身近に置いて眺めては、絶えず省察していたであろうと思われます。また、ヨーロッパ各国の美術書や、イスラム文化が花開いたようなオリエントの美しいタイル、中国 唐の時代に作られ副葬された発掘品の婦人俑など、児島が海外で興味を持ってコレクションした貴重な品々に、児島の幅広い見識と熱意が感じられます。

これら古代に及ぶ歴史と文化の薫り高い古美術品に囲まれて、児島は悠久の世界に心を遊ばせながら作品制作に努めたことでしょう。このアトリエからは、西洋と東洋の文化を融合させた新しい洋画の確立に腐心した児島の姿が偲ばれます。

今森光彦　自然と暮らす切り紙の世界

2019年7月13日[土]～9月1日[日]

繊細で色鮮やかな切り紙作品に見入る来場者

著名な写真家であり、〝切り紙〟の世界で新たな境地を切り開いている今森光彦（1954－）の切り紙の最新作品および写真作品約200点を展観しました。

本展覧会は、二つの意味で作品と鑑賞者の〝距離が近い〟展覧会であったと思います。と言うのも、まずはなにより双方の距離が「物理的に」近かったことが挙げられます。皆さん一様に作品にぐっと顔を近づけ、その技術の細やかさに驚きつつ目を皿のようにしてご覧になる様子は、これまでの展覧会を振り返ってみてもなかなかに珍しい光景でした。そして二つ目が、「精神的に」という意味。今森の作品は、難しい予備知識などなくとも、老若男女が作者の感動に共感し、親しみを覚える作品と言えるでしょう。作品のモチーフは、多くの人が幼少期に触れ合ったであろうアゲハチョウをはじめとする身近な昆虫から、地球の裏側に生息しているような日本では見慣れない生き物たちまで様々。今森の手から生まれた切り紙作品からは、自然の造形の美しさや神秘が感じられ、それでいて、どこかチャーミングで生き生きとした姿に見る人は癒されたことでしょう。また、制作に使用する道具も特別なものではなく、色画用紙に、ごく一般的なハサミやでんぷん糊といった私たちにとって身近なものばかり。「家に帰ったらやってみよう！」そう思ったお客さんも多かったのではないでしょうか。

会期中には、今森本人によるギャラリートークやワークショップ、倉敷市立自然史博物館 奥島雄一学芸員による昆虫教室を開催し、夏休みということもあり、家族連れを中心にご来場いただきました。

今森の作品は、豊かな自然に囲まれて育ったという自身の原体験に深く根差しています。それらが失われていく危機感から実際に環境活動に取り組みながら作り出す作品は、ただ美しいだけではなく、力強さと訴求力を兼ね備えています。身近にある命の輝きに気づかせてくれると同時に、〝人と自然との関係〟にあらためて目を向けるきっかけとなる展覧会でした。

写真による今森の里山生活の紹介も

7月13日（土）オープニングギャラリートーク
切り紙の制作過程を説明する今森（中央）

8月11日（日）夏休み！ わくわく昆虫教室
自然史博物館の奥島学芸員（中央）のレクチャーの下、美術館裏山にて昆虫採集を行いました。

今森光彦　切り紙ワークショップ

8月4日（日）、切り紙ワークショップを行いました。本イベントは、今森光彦本人が講師を務めることもあり、定員20名のところ、なんと100名近い応募があり、抽選を行っての開催となりました。

ワークショップでは、今森先生が即興で「アゲハチョウ」を切ってみせてくださる大サービスも。下書きなしで、しかもおしゃべりしながら、いとも簡単に翅や触角の形まで細やかに表現していく様子を、小さなお子さんも食い入るように見つめていました。制作が始まると、今森先生は一人ひとりに丁寧にレクチャーをしてまわり、参加者の皆さんも切り紙の作品作りに熱中…。カマキリやトンボ、ザリガニなど、色鮮やかで個性豊かな作品が次々に生まれていました。

後日、切り紙の新作ができたと、写真に撮って送って下さった方もいらっしゃいました。本イベントが一過性のものではなく、日々の生活をさらに楽しく豊かにするきっかけとなったようで、主催側としてもうれしく思いました。

倉敷ガラス 小谷眞三 羽原明徳コレクション

2019年7月13日［土］～9月1日［日］

光を受けて輝く 故 羽原明徳氏愛蔵の倉敷ガラス

倉敷ガラスの創始者である小谷眞三（1930-）の展覧会は、当館では2回目であり、小谷が成羽町にほど近い後月郡芳井町（現 井原市芳井町）生まれであることを考えると縁の深さを感じます。15年前の展覧会は小谷の回顧展ともいうべきものでしたが、この度の展覧会は、小谷眞三のよき理解者であり支援者でもあった、古代ガラスのコレクターとして高名な故 羽原明徳氏の倉敷ガラスのコレクション約100点を、ご遺族の協力のもとに一堂に展観したものです。

本展覧会は、昨春、小谷本人が高齢を理由に制作活動の中止を宣言したこともあり、倉敷ガラス愛好家にとって、初期からの作品を一堂に鑑賞できる願ってもない機会であったと思われます。作品は小谷の巧みな技術を駆使した花瓶から、可愛らしい亀の形をした水滴や、コレクター垂涎の作品である香水瓶、そして色とりどりの酒盃とワイングラスなど、どれをとっても小谷ワールドの魅力あふれる珠玉の逸品ぞろいでした。

会場である1階の静水の庭に面する吹き抜けホールは、周囲がガラスに囲まれているため晴れの日には朝から夕方まで光に満ちあふれており、倉敷ガラスの美しさがいかんなく発揮されました。

壁面には、小谷本人からのメッセージをはじめ、コレクター 羽原明徳氏と小谷との温かな交流の記録をパネル展示し、作家とコレクターとの素晴らしく美しい関係性をご紹介しました。また、羽原氏の息女 羽原恵子さんのあいさつ文からは、小谷への尊敬と亡き父への深い愛情が感じられ、読む人の胸を打ちました。

展覧会に合わせて、羽原恵子さんの編集でこの度の展示品のすべてを掲載した記念のカタログが作成されました。小谷と羽原明徳氏のふたりの親交の証として、多くの人の目を愉しませることを願ってやみません。

初期からの貴重な品々が並んだ

会場風景

左の写真には羽原氏（右端）と小谷（隣）が映る

カタログ

『倉敷ガラス 小谷眞三　羽原明徳コレクション』

定価　本体500円＋税

作品図版の他、寄稿文「羽原さんの思い出」（小谷眞三）、「倉敷ガラスと過ごした家族の風景、そして感謝を込めて」（羽原恵子）など収録。

当館ミュージアムショップで販売しています。
※当館ウェブサイトより通信販売も承っています。

106歳を生きる 篠田桃紅
―とどめ得ぬもの 墨のいろ 心のかたち―

2019年4月13日[土]～6月30日[日]

会場風景

人生100年時代を迎えた今日、106歳(当時)という高齢でありながら現役で活躍している水墨抽象画家 篠田桃紅の展覧会を、公益財団法人岐阜現代美術財団と鍋屋バイテック会社の全面的な協力のもとに開催しました。

篠田桃紅は近年になってテレビでもその姿が紹介されるようになりましたが、それまでは知る人ぞ知るという存在でした。桃紅は1913年に満州で生まれ5歳から書道の手ほどきを受け、戦前から和歌をたしなみ漢籍や古典をはじめとする日本文化に親しんで育ちました。20歳で書家として独立するなど、当時の時代背景を考えると先進的と言える、独立独歩の姿勢が既に現れていました。桃紅は古典的な書に飽き足らず、前衛書の世界で将来を嘱望される作家として活躍していましたが、書という枠に納まりきらない墨による自由な美の表現を求めて渡米します。

当時NYではジャクソン・ポロックをはじめとした抽象表現主義が一世を風靡しており、桃紅作品は高い評価を得ることとなりました。桃紅は約2年間の海外での活動と発表で自信を深め、作家としての確かな地歩を築くとともに、帰国後から今日まで墨による抽象絵画の斬新で気品あふれる大作を国内外で発表しています。

この度の展覧会は、篠田桃紅の回顧展ともいうべき内容で、初期作品から近作まで約80点を4つの章で紹介しました。

1

2

3

4

第1章では渡米前の初期作品を、書道家としての片鱗がうかがえるような文字作品から、線の美しさとリズムを追求した抽象的な作品まで紹介。この時代にすでに将来を予感させるような水墨抽象絵画ともいうべき秀作が見られます。第2章は、アメリカで発表した作品に加え、建築とのコラボ作品で構成。当代の一流建築家との共同作業で桃紅作品に一段と近代的斬新さが加わりました。第3章は、帰国後の1970年代、80年代の代表的な作品を中心に日本的な抒情性を帯びた作品も加えています。[1] この時代から金地や銀地を用いた作品が多く見られます。最後の第4章では、昨春の改元で話題になった万葉集と上皇、上皇后両陛下への想いを作品にした屏風の大作が目を引きました。[2] また、ゆうに90歳を超えた年齢で制作した、2mもの画面に薄墨で描いた「祭りシリーズ」の気力溢れた作品、[3] 100歳の個展で発表した金地に銀泥で無数の線を描いた作品[4]のしなやかな緊張感に、篠田桃紅の老いてなお成熟深化してゆく姿を感じ取りました。

ご覧になる方はそれぞれの想いで作品に向きあっていましたが、皆さん一様に新たな気力をもらったことと思います。

「“わたし”と出会う」ワークショップ
開催日　6月9日(日)

講師は、日本画家で倉敷芸術科学大学教授の森山知己先生。「一本の線を引く」という単純な表現を通して、さまざまな墨の表現を楽しんでいただきました。墨が乾くのを待つ間には、展示室で素材の観点から森山先生に作品解説をしていただきました。

記念講演会
開催日　5月19日(日)

九州国立博物館の島谷弘幸館長をお招きし、「現代書の展開と篠田桃紅」という演題で講演会を行いました。空海から相田みつをまで、書の変遷の歴史を紹介しながら、その中での篠田桃紅の位置づけについてのお話や、主な作品の解説をしていただきました。

ミュージアムコンサート
開催日　4月21日(日)

演奏者は、箏(そう)の佐藤美由樹さんとヴァイオリンの大倉理佐さん。曲目は、春の海(宮城道雄作曲)や愛の挨拶(エルガー作曲)、日本の歌メドレーなど、まさに和と洋の共演。フレッシュなお二人が奏でる美しい旋律に、会場の皆さんはうっとりと聴き入っていました。

オープニングギャラリートーク
開催日　4月13日(土)

篠田桃紅展開会式の後、展覧会場にて岐阜現代美術館シニア・キュレーター 宮崎香里さんに作品解説を行っていただきました。篠田桃紅の作家としての生い立ちや、当時の時代背景を踏まえながら、作品の解釈についてお話しいただきました。

今年も個性的！ 岡山県立大学とのコラボグッズ開発「NARIWA FLORAプロジェクト」

ショップに並んだグッズたち

7月21日(日)開催
学生によるグッズ発表会

今回で6回目となる、岡山県立大学デザイン学部造形デザイン学科3年生とのオリジナルグッズ開発。成羽の植物化石をモチーフに、個性的な作品が出揃いました。特に、今年からセラミックデザイン専攻の学生さんが新加入し、グッズの幅もぐっと広がりました。Tシャツ、絵葉書、バッグなどの定番商品はもちろん、うちわやぬいぐるみキーホルダー、そしてセラミックならではの陶器のコップも登場しました。

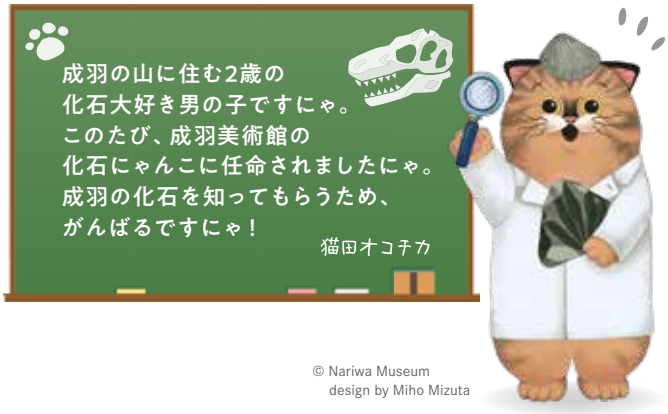
今年もたくさんのお客さんが手に取ってくださいましたが、毎年恒例の企画として定着してきたのか、いつも一番に駆けつけてくださる「固定ファン」も。楽しみに待っていて下さるお客さんのために、引き続き魅力的なグッズをお届けしていきたいと考えています。

ポップでかわいいグッズが充実

コラボグッズから オリジナルキャラクター「猫田オコチカ」誕生！

グッズデザインの中に、貝化石「モノチス・オコチカ」を頭にのっけた、ちょっと太めの猫ちゃんがいました。作者はテキスタイルデザイン専攻の水田美穂さん。この度、この猫ちゃんを成羽美術館の化石キャラクター「猫田オコチカ」として採用させていただきました。

今後、化石の展示やワークショップなどで登場予定です。どうぞよろしくお願いいたします！



© Nariwa Museum
design by Miho Mizuta

化石ワークショップ

昨年から始まった化石ワークショップ。各月2回とコンスタントに続けることができ、各回平均10名前後のお客さんに参加していただきました。定番となった「アンモナイトのレプリカづくり」に加え、今年は「星砂の標本ケースをつくろう！」「クイズを解いて、歯博士になろう！」「成羽の恐竜時代のジオラマをつくろう！」などさまざまなテーマにチャレンジしました。

星砂の標本ケースをつくろう！

沖縄の砂浜には、生き物の遺骸でできた特別な砂「星砂」があります。その正体は有孔虫という、石灰質の殻を持った1㎜前後の小さな小さな生物。たくさんの種類があり、虫眼鏡で見るとさまざまな形の殻が見えます。ワークショップでは、殻の形から種類を特定し、海の小さな生き物について学びました。

星砂の観察に熱中…。

歯の形も生物によってさまざま

クイズを解いて、歯博士になろう！

生物の歯は、その食性にあわせてびっくりするぐらい様々な形、大きさがあります。魚類、爬虫類、哺乳類の歯の化石を実際にさわって観察し、その歯の持ち主がどんな動物だったのか、研究者が実際に行うのと同じように推理しました。全部解明できた子には、歯博士認定証の授与もありました。

成羽の恐竜時代のジオラマをつくろう！

成羽の植物化石や、その森に暮らしていたと考えられる動物たちについて学び、2億3千万年前の世界をジオラマで再現しました。太古の時代の、成羽に広がる不思議で豊かな森が、色紙や粘土を使って個性あふれる「作品」に。タイムスリップした気分で時間を忘れるひと時だったようです。

来年度も月に2回ほどのペースで開催予定です。子どもから大人まで、皆さんのご参加をお待ちしています！（当館ホームページ・SNSで情報を公開しています。）

太古の成羽はこんな世界？

児島虎次郎を偲ぶ絵画展

2020年1月11日[土]～2月2日[日]

令和元年度は、市内小中学校20校から1，222点の応募がありました。今年も学校行事や故郷の風景、自画像など様々なテーマで描かれた力作揃い。審査を経て各学年の最優秀賞にあたる「児島賞」、次点の「渡辺賞」などの受賞作品を含む205点が選出され、個性豊かな作品たちが多目的展示室に並びました。

【児島賞】《つかまえた？ あみの中を見せて》
松原小5年 大森結菜さん

1月28日（火）には表彰式を開催し、受賞者へ高梁市教育委員会 小田幸伸教育長より賞状と記念品が贈られました。また、昨年度に引き続き洋画家 片山之男氏が各作品の講評を行い、受賞者は熱心に耳を傾けていました。児島賞・渡辺賞受賞者は次の通りです。

（敬称略）

【児島賞】

大月里音（川上小1年）、藤川俐生（川上小2年）、小見山歩（川面小3年）、加藤優永（有漢東小4年）、大森結菜（松原小5年）、平松倖好（川上小6年）、森下和弥（高梁北中1年）、三村真奈美（成羽中2年）、原田紘輝（成羽中3年）

【渡辺賞】

土谷擢斗（成羽小1年）、村井蒼太（高梁小2年）、藤井心晴（有漢西小3年）、佐藤淳哉（福地小4年）、平松栞（松原小5年）、福本実愛（中井小6年）、小松心愛（高梁中1年）、小見山日菜（高梁北中2年）、原田和弥（成羽中3年）

ミュージアムツアー「美術館まるごと探検隊」

2019年11月30日[土]

世界的に有名な建築家 安藤忠雄氏の設計である高梁市成羽美術館。各展覧会もさることながら、美術館の建築そのものも大変見応えがあります。この魅力を、もっと多くの方に発信しなければ！ と、新イベントを企画しました。その名も「美術館まるごと探検隊」！ こちらは、「みるを楽しむ！ アートナビ岡山」と、「建築家のしごと実行委員会」メンバーの方々にご協力をいただき、開催に至りました。

このツアーは、専門家による建築の解説ではなく、参加者全員で建築をじっくり鑑賞し、「コンクリートに空いている穴は何？」などの素朴な疑問や、「ここからの眺め、サイコー！」といったような呟きまで、それぞれが見つけた建築の味わいを共有、共感していくというイベントです。参加者の些細な気づきが、実は建築家のこだわりがわかるキーポイントだったり…建築との距離感がグッと縮まる時間となりました。

ただ今、第二弾を計画中！ 乞うご期待♪

美術館のすみずみまで、くまなく探検。
それぞれの「発見」をみんなでシェアする
楽しいひとときでした。

岡山文庫『児島虎次郎と高梁市成羽美術館』刊行

岡山に関するさまざまな事柄を取り上げて紹介する書籍シリーズ「岡山文庫」（日本文教出版株式会社）より、このたび『児島虎次郎と高梁市成羽美術館』が発行されました。

児島虎次郎没後90年、当館の新築開館25周年を記念し、児島の画業と生涯、また成羽美術館の歩みや見どころを、写真とともに読みやすくまとめています。

倉敷芸術科学大学芸術学部の松岡智子教授による寄稿「児島虎次郎の功績」や、陶芸家・当財団理事長 児島塊太郎氏執筆の「児島虎次郎の旅 祖父 児島虎次郎を語る」は児島の活動に詳細に迫り読みごたえ十分。当館の所蔵品を中心に選り抜いた児島作品の解説も収録しています。この1冊をお供に成羽美術館で児島虎次郎作品を鑑賞してみてはいかがでしょう？

高梁市成羽美術館編
『岡山文庫 315 児島虎次郎と高梁市成羽美術館』
定価　本体900円＋税
当館ミュージアムショップで販売しています。
※当館ウェブサイトより通信販売も承っています。
また全国の書店でもお買い求めいただけます。

当館ウェブサイト
https://nariwa-museum.or.jp/